

一般の部 最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「僕の居場所」

豊後高田市 下山 尚美

ある日、小学校に息子を迎えに行くと、誰もいない教室に担任と2人。息子は、机の上にナイチンゲール、キュリー夫人、ライト兄弟3冊の伝記を積み重ね、夢中となり本を読んでいた。今ではたくさんの本を読むようになった息子も最初から本が好きだったわけではない。10才の息子は、現在、特別支援学級に在籍している。

「読み聞かせ」という言葉を知ったのは、息子がまだおなかの中にいる頃だった。大切なことだと育児雑誌にも書かれていたけど、出産後は、育児に仕事と大忙しとなり、読み書かせどころではなくなっていた。そんな時、一つの出会いが訪れた。幼稚園に絵本の大切さを教えてくれる講師がやってきたのだ。その先生の話聞いて、「無理でも、始めてみよう」と思い、月刊の絵本を購入する事にした。しかし、ここからが大変だった。絵本を月1回もらえる事に対しては、特別な事だと喜んでいたが、最初の半年頃までは、数行読んで逃げる様な状態で、なかなか聞いてはくれなかった。それどころか、ビリビリと本を破きはじめた。息子にとっては、読み聞かせよりも本を破いたりする方が楽しいようだった。

読んでも読んでも聞いてくれない息子と、聞いてくれなくても最後まで読むと決めた母の我慢比べの日々が始まったのだ。そこへ、夫も参戦。夫は、絵本を逆さ読みにしたり、関西弁にしたりと絵本で息子を笑わせた。読み聞かせが難しかった息子も、絵本に触れる事が増え、絵本があれば笑い、家族が笑った。それから少しずつ聞ける時間が長くなり、年長になる頃には、自ら5、6冊もの絵本を持ってきて、「読んで、もう一回。今度は、おもしろく読んで」とおねだりする様になった。

そんな息子も、いよいよ小学校へ入学。期待とは裏腹に絶望が待っていた。授業に参加できず、友達とは喧嘩ばかりの日々。じっとできない息子は「学校」という縛られる環境に、ストレスを感じ、苦しみ、涙を流した。この時期息子には特性があることがわかり、自分自身をコントロールするのが非常に難しい状態であった。

息子は、何かトラブルがあると逃げまわり隠れる様になった。自分の居場所は、ここにはないと思い、校内をウロウロすることが増えた。ある日は、家庭科室の机の下、又ある日は、階段に隠れて過ごす日々が続いていたのだ。そんな中、息子が自分の居場所として選んだのは「図書室」だった。当時、私は息子が自ら本を読む姿を見た事がなく、本が読めない子だと思っていた。パニックを起こした時は、図書室で好きな本を手に取り、静かに読んでいると担任から聞き、本当に驚いた。気付くと、一日のほとんどを図書室で過ごす様になっていた。いつしか息子にとって図書室は、心のより所となっており、本のある環境が彼の一部となっていたのだ。授業に参加出来ない事も多いが、本から得る知識は多く、息子を大きく成長させてくれる。雑学王になりつつある息子。クラスメイトもそんな息子の良い所を褒めてくれる様になり、今では、担任の先生方の協力もあり、両者が歩み寄る事が出来る様になった。この事は、息子にとって大きな一歩だった。

私は思う。息子があの時、絵本と出会う事がなければ、自らの居場所を見つける事が出来たであろうか。今もまだ、探し続けて悩んでいたのかもしれない。読み聞かせをはじめて6年間。もう、私が出る幕はなくなった。今は、自ら読みたい本を手に取り、覚えた事を私に教えてくれるのだ。

最後に息子に聞いてみた。「本は好き？」すると、息子はこう答えた。「わからない。たぶん、好き」最高の答えである。

「父の本棚」

大分市 朝日 容子

茶の花が淡く咲く初冬、父は六十一歳で旅立った。定年退職後のある日、父は母と共に私の家に来て孫たちと楽しいひとときを過ごした。帰り際、父は私に一冊の本を手渡した。表題は『花無心』。長年に亘って書き留めた随想、詩、俳句等が認められ自ら描いた曼珠沙華や茶の花など淡い色彩で添えられている。

「『花無心』って何ね？」

父に訊いた。

「まあ、読んでみりゃ分かるよ。父ちゃんはこの本を書いたんで何も心残りはねえんだ」にこりと笑い、私の顔をまじまじと見た。

その二日後、父は病を得て不帰の客となってしまった。娘の私には、それが残念でならなかった。

葬儀が一段落着いた日、私は父の部屋をのぞいた。父の温もりと匂いが微かに残り壁際に陣取った本棚に目が留まった。夏目漱石、太宰治、島崎藤村など、なかでも漱石の全集はずらりと並んでいる。余程、漱石に傾倒していたのであろう。その中の一冊を手に取り、パラパラとめくってみた。父の手垢がうっすらと滲んでいて、ぼろりと涙が零れた。（残された文学書、あと誰が読むのだろう……）文学的素養の浅い私は戸惑った。

そんな中、市の読書会の募集を知る。もしかしたらこれらの本を読み進めることが出来るかもしれないと思い、入会することにした。

読書会の会員は三十代半ばから八十代に亘り、六十代以上が七割を占めていた。当時、三十六歳の私は、この会に来れば「若い人」と呼ばれ、妙に居心地がいい。月に一冊、課題の純文学作品を読み読後感を話し合う。

最高齢の男性は、中河与一の『天の夕顔』、川端康成『雪国』等、八十代とは思えぬ程、ストイックな恋物語を提案し、瑞々しい、更に「文学は情熱を呼び起こしてくれる大切な友人だ」と言う。読書に親しむ姿勢を訊ねると「何も最初から難しい本じゃなくとも、好きな本から始める。そんうちに世界が広がり他の本も読んでみとうなるから。今一つは、読むことを習慣付けることじゃな。私は八十三になるが、毎日歩くことと読書は欠かしたことがないんじや」と笑顔で話す。

（ああ、若さの秘訣は、ここにあったのか！）私より、ずっと年上なのに心はずっと若い。

明治、大正の作品を読むに於いては年輩者が生き証人となって熱く語る。自らの戦争体験、当時の社会情勢、暮らし向き等、鮮烈に蘇る。単に粗筋を追うのではなく、一歩踏み込んで自らの考えを展開させていき、仕舞には人生論、人間愛、教育論にまでも及んで、「今の子供たちの問題は、親である私たちにも責任がある」と反省を込めた意見も飛び交う。爽やかな作品に心洗われ、どろどろした作品から人生の深淵をのぞきみて、自らの感性や考えを深める。それに作品ゆかりの地を訪れる文学散歩も楽しみの一つである。

思えば、戦後のベビーブームに生まれた私達は、受験も就職も全て競争の中におかれた。何につけても、ゆったりと考え、行動する余裕が無かった気がする。ところが六十六歳になった今の私は、この読書会にどっぷりと浸かって読書の楽しさを味わっている。読破した本も三百冊を越えた。文学に縁の無かった私が、広く本に接することにより読むことと同時に書くことの愉しさも知ることができた。

そして十年前、学生時代を過ごした熊本の地を訪れ、拙いながらも紀行文を書くことが出来た。その旅先で父が敬愛した夏目漱石のお孫さんにお会いできる幸運にも恵まれ、夢のような出来事となった。

のちに父が文学に情熱を傾けた証として、唯一の形見となった『花無心』の意味を調べた。（禅語で、事象にとらわれず、今この一瞬を大切に生きること）。この年になって漸く父の思いが、じんわりと胸に響いてくる。

今回の課題書は、くしくも漱石の『門』である。

一般の部 優秀賞

『路傍の石』を再読して

大分市 板井 奈穂子

「あー、読書感想文、どうしようー。」

毎年、夏休み後半になると聞こえてくる娘の悲鳴である。娘は今年小学校 5 年生。御多分にもれず、読書感想文は苦手らしい。こう見えても私は、小学校 5 年生の時に、山本有三の『路傍の石』を読み、読書感想文を書いた記憶がある。この事を私自身、少なからず自慢してきた。5 年生の時に『路傍の石』を読んだ。しかも担任の先生から「良い本を選びましたね。この本を友達にも薦めて下さい」というコメントを頂いたことは、私に大きな自信を与えてくれた。

感想文が書けずに四苦八苦している娘を横目に内心、

「どうしてそんなに書けないのか」

「もう少し大人っぽい作品を読めないのか」

「私が 5 年生のころは・・・」

という思いがふつふつと湧いてくる。そんな思いを抱きつつ、娘に文句を言う前に一度読み直してみようと、再び手に取った。

三十数年ぶりに読み始めて、私はひどく驚かされた。それは、この作品がこんなに難しかったのか、という事である。自分は本当にこの本を読んだのだろうか、とってしまった程である。一つひとつの語句にしても、またこの作品の時代背景にしても、当時の私が一体どれだけ理解できて読んでいたのだろうか。ほとんど理解できずにいたのではないだろうか。今回読み返す時も、時々巻末の「注」を引きながら読まなければ理解できなかったのだから、小学生だった私は作品の雰囲気は感じていたかも知れないが、ほとんど上すべりで字づらを追っただけだろう。これでよく感想文書けたものだと、我ながらあきれてしまった。

吾一少年が置かれた過酷な境遇も、現代とはあまりにもかけ離れているため、四十を過ぎた自分は少しは想像がつくものの、十才過ぎのあの当時、吾一少年の貧しいゆえの苦しみ、悲しみ、理不尽さ等の心情をどれだけ感じとれただろうか。ましてや今、我が娘が読んだとしてもほとんど理解できないのではないだろうか。今回、それ程の衝撃を受けた。

改めて振り返ってみると、私は読書は好きだが特別速読でも多読でもなく、どちらかと言うと 1 冊の本をじっくり読み余韻にひたる方だった。それなので、ある作家の作品を全て読破等という事は到底できない。数多く読んでいる訳でもなく、読んだと思っていた本も実は大して読み深められてもいなかったのだ。そう思うと、今まで娘に対して物足りなく思っていた自分が恥ずかしくなってきた。

こんな私だが『路傍の石』には深く心に残っている部分がある。それは吾一少年が進学の夢を絶たれ、呉服屋へ奉公に出た時の場面である。恩師からいい名前だと言われて誇りにしていた「吾一」という名前を、奉公先であっけなく「五助」に変えられてしまう。その事で吾一はひどく傷つくが、当時の私は名前を変えられる屈辱が理解できずに「どうしてそこまでこだわるのか」と感じたのだった。

しかし時がたち、私も大人になるにつれて、名前を変えられるという事は、私が私であるという「自分」の存在すべてを否定し、打ち碎かれるような屈辱的な行為だということが理解できるようになった。そんな時ふと、かつて読んだ吾一少年のことを思い出し、その屈辱を改めて味わってきたのである。

読書とは、読んだその時に感じたり理解したり心に響いたりするだけでなく、何年もたってから不意に「ああ、あれはこういうことだったのか」と教えてくれたりもするのだ。多読でも速読でもない私だが、こんな読み方もきっとあってよいだろう。

「あーお母さんどうしよう。感想文が終わらん。」

また、娘の声が聞こえてくる。やれやれ、と思いつつ、今までよりは少し柔らかい声で娘に答えることができた。

「キラキラさかな」

国東市立国東小学校 1年 瀬田 夏未

わたしは、どくしょがすきです。おはなしのなかに いるみたいになります。たのしいおはなしが いちばんすきです。

きょねんまでは、あんまり えほんを よんでいませんでした。ようちえんの ねんちゅうのなつやすみになったとき、おかあさんが がようしで おおきさかなを つくってくれました。

そして、

「さかなにうろこをはって。ほんを1きつよんだら、さかなにうろこを1まい はるよ。」
といたので、たのしそうだとおもいました。

おかあさんが、

「もくひょう なんさつにする？」

ときいたので、

「100さつにする。」

といました。キラキラのおりがみをもらって、うろこを100まい きりました。2じかんもかかりました。

さかなは、りびんぐに はって かぞくや おきやくさん みんなに みてもらいました。

おばあちゃんが しごとからかえってきたら、まいにち

「うわあ、きょうも がんばったんやなあ。キレイになったな。」

とってくれて、すごく うれしかったです。

うろこが だんだん いっぱいになって、さかなが きれいになっていって、とってもとっても うれしくなりました。『にじいろのさかな』みたいにピカピカになりました。うろこを はるのが たのしみで、どんどん どくしょが すすみました。

おかあさんが、かわいいノートをかってくれて、よんだほんの だい と さっすう を かくこともしました。

としょかんに たくさん いくようになったので、ししょさんも わたしのことを おぼえてくれて なかよくなりました。だんだん、ししょのおねえさんが、おすすめの ほんを えらんで まっていて くれるようになりしました。きょうは、どんな ほんを えらんで くれるかなと たのしみになりました。

なつやすみのおわりのとき、172さつ よんでいて、さかなが 2ひきになりました。おおきな かみにはって すいぞくかんを つくって ようちえんに もっていきました。おともだちや せんせいから ほめられて、つづけて がんばろうと おもいました。

いまは、じ が いっぱいの ふといほんも よめるようになりしました。きろくのノートも 3さつめになって、1100さつをこえました。

このまえ、おかあさんが こどものときに よんだのと おなじほんを よみました。いままだ あるって すごいなって おもいます。

ほんは、わたしが しらないことが いっぱい つまっていた たのしいです。これからも、ほんを いっぱい よんで いろんなことを しりたいです。

「私の礎をつくるもの」

大分県立大分豊府中学校 2年 尾形 萌音

私の家の2階の廊下には、大きな本棚がある。絵本や児童書が200冊以上並んでいる。私はよく、本棚の前に座り込んで、好きな本を手に取り、ついつい熱中して読んでしまう。読書は私にとって、日常生活の中のちょっとした息抜きであり、本当に大好きな時間なのだ。忙しい中でも、ひまを見つけては、読書に勤しんでいる。

最近、「パーシー・ジャクソンとオリンポスの神々」という本を夢中になって読んでいます。本を開く。主人公たちの友情や恋愛、仲間とともに戦い、苦しみながらも成長していく姿、物語の世界に入り込み、空想の世界に没頭する。好きな本を読んだ時の満足感や楽しさは、何事にも代えがたいものだ。

私がこんなに本を好きになったのは、子どもの頃、両親が毎日たくさんの絵本を読んでくれたからだと思う。毎晩寝る前に父か母が、私と姉の好きな絵本を読み聞かせしてくれた。特にお気に入りの絵本は、「うちにかえったガラゴ」で、何百回読んでもらったか分からない。お休みの日、1日に8回同じ本を読んで読んでとせがんで、読んでもらったこともあるそうだ。他にもたくさんお気に入りの絵本があり、今でも時々、手に取り読んでみる。自分で読んでもやっぱりおもしろい。

色々な絵本の世界の空気感は、私の中にしみ込んでいき、幼い私は絵本の中の言葉をどんどん吸収していった。今でもふとした時に、絵本の中の言葉が口をついて出てくる事があるくらいだ。父や母や姉も、同じような事があり、みんなで顔を見合わせて笑ってしまう。そんな時、心が温かくなり、絵本をたくさん読み聞かせしてもらって、本当に幸せだったなあと思う。

人は、思考するときに、言葉を使って考えていると思う。子どもの頃から様々な絵本の世界に触れ、美しく豊かな言葉を吸収できたことは、私の宝物となっている。私の思考の礎には、絵本の中の言葉たちがあるのだ。

中学生になった今、読みたい本も読むべき本もたくさんある。読書は私の世界を広げ、その中で出会う言葉たちが、私の思考を深めてくれることだろう。これからも、どんどん本を読んでいくつもりだ。読書は、今の自分の楽しみでもあり、未来の自分への贈り物でもあるのだ。

「曾祖母の温もり―読み聞かせをとおして―」

大分県立三重総合高等学校 1年 佐藤 悠衣

私の本との出会いは4才でした。それは眠ることへの恐怖とともに訪れたのでした。

当時4才だった私は、曾祖父母の家を訪れていました。遊び疲れていつのまにか眠りについたら目が覚めると、辺りには誰もいません。実は、病院にいる姉に付き添うため父母はそっと抜け出していたのでした。しかし、当時の私はそんなことを知る由もありません。大声で父母を探す私に「悠衣さん、どうかしましたか。」と優しく声を掛けてくれたのは曾祖母でした。父母に置いていかれたとパニックになった私は、それ以後、できるだけ寝ないように寝ないようにと大声を上げ、暴れるようになりました。

そんな私を落ち着かせてくれたのは、曾祖母の「読み聞かせ」でした。毎夜毎夜、私が落ち着くまで気長に待ってから、「悠衣さん、今日はこの本を読みましょね。」そう言って優しく手を握り、寝かしつけてくれるのでした。印象に残っているのは、自分の爪が嫌いな少年の話です。少年は不思議なおじいさんから動物たちの爪をもらうのですが、実際付けるととても不便で後悔します。そこでおじいさんは元の爪に戻すのですが、曾祖母の「悠衣さんも、今の悠衣さんが一番素敵ですよ。」と言ってくれたことが一言が忘れられません。このような毎日を過ごすうちに、私は安心して眠ることができるようになりました。

私を寝かせてくれる本が、絵本から小説になっていった中学生時代、すっかり読書にはまった私を、友だちは「読書好き」と評して図書委員長に推薦してくれ、私の本に対する愛情はどんどん深まっていき、本無しでは生きていけないようになっていました。

その頃、90才を迎えようとしていた曾祖母は高齢のためか、歩くことができないようになりました。表情まで乏しくなり、とうとう施設で寝たきりの生活を送るようになりました。私は時間があれば施設に通い、曾祖母に本を読み聞かせするようにしました。早く元気になって笑顔が見たい、そんなことを思いながら。施設に通い始めて3ヶ月が過ぎたとき、その日はちょうど曾祖父の誕生日でしたが、自宅で行った誕生日パーティーに参加できなかった曾祖母のために、いつもより張り切って読み聞かせをしてあげました。半分ほど読み進んだ時、曾祖母がそっと口を開きました。「悠衣さん、ありがとう。」笑ったような気がしました。曾祖母は疲れたのか、そのまま眠ってしまいました。そして、二度と目を覚ますことはありませんでした。曾祖母は私の読み聞かせを最後まで聞かずに、旅立ってしまったので、葬儀の日、遺影の前で残りの部分を読み聞かせしてあげました。

私にとって「読書（読み聞かせ）」とは、「曾祖母の温もり」を感じることで、曾祖母は読み聞かせを通してたくさんのことを教えてくれました。お米には神様がいるから一粒も残してはいけないこと、どんなときも私の側には家族や友だちがいることなどを、いつも優しい声で伝えてくれました。幼い私は不安や恐怖を忘れ、安らぎを手に入れることができました。さらに読書家としてのきっかけを与えてくれ、多くの本との出会いへと導いてくれました。すべてが「曾祖母の温もり」であったと感じ、感謝の気持ちでいっぱいです。本にはその本自体の物語だけでなく、その本を取り巻く人々の物語があると聞いたことがあります。読み聞かせの思い出は私と曾祖母、そして書齋で眠っていたたくさんの本たちとの思い出でもあります。一つひとつが宝物となって今の私を作っていると感ず。

現在、高校生になった私は演劇部に入りました。今は「読むこと」から「演技」を通して「物語の世界」を生きています。まだまだ指導されるばかりで少しも上手ではありませんが、精一杯の私を曾祖母が笑って見ているのではないかと思いながら……。